



本清





孝婦實文卷

○鳥の来る椅子と毛

父儀の里の娘のいは四季のよき別れ見るが  
中よりお今夜の毛すら仲の町の毛毛ふ  
あ毛あん毛のりふ毛も毛まてふもうれ  
立々葉の新もまたゆき大門に蘭麝の  
葉す噴ゆる茶を毛が毛理ふ寒とうらぬ

室四ノ二



香炉峯の雪を除いても金人忌を止  
して血まみれ強て於懶の捨ふ老の金の  
洗濯場のつねに生る鶴あれど棹をす  
ゑふあざれあ人のふぞ是板のあへたと  
やどみへ伯母とほき立大門のうちへ送ひ  
伯母あんとおまみや仲の町のまきと  
彼のまきあるのよまきあそぶゆうで  
あざれます伯母とふざくらぬさんがお達へ

まき四

もまだどうあるかとがはりふの者をは  
まく客の客のゆうみが姿をとて客モ  
里通さんや奇麗なりんぐの里通キ  
あまくあまゆう狹ふ人づらもす一偏故と  
遠て又接るご子客づく一刻りのあぶ  
あやのあそとあひだらう里相もよう  
をあらの方がよづらうト行(まづ)の葉やの安カラ  
吉さんとま実ふうらう娘(ヨ吉)

さゝサ種へ大勢ひの女郎さんの中でも  
あり位まのへおぎうやせんとあきゆけの女へ  
あぢやまちゅう湯ふりんとそす枝を肩こり  
揚ぬ町の湯ふりんとそす枝を肩こり  
葉やまちゅう女もくモと伴のさん一すと見るナ  
ねのあらまさんぐるくしとせのくあら  
あらえうくい娘が来るヨ伴の女もく  
もくアヒとおえあやせうとりまちまく  
めうてあとけの女と部屋を合せてたゞひふ

ちうと袖のうちねまみへとうとう鶴さんとよ  
哉あぢやまちゅう鶴さんとよ  
えうづくわび傭うり伯母へあまへあとうか  
えみねをかいひあくとひれて難む怖む  
畏れをばうりあらむ都のあじき今ま  
あんとよしきうりあらまつたうらで  
よくはくお方がお出あられまつたうらで  
くまみこみへあとくあうとお方みともあく  
たうふアレハ鶴さんとゆりどもりひよる

ほりもあくびう人間の閑やまみさへられ  
あちつての知らぬ都かねと居ゐさんよな  
き人遠ちがひうまえすとも候まう能よく  
都かね寄よら那ないが居ゐしておはままを能よく  
さぬのわ情きでアモモねのひひをもせとの  
るのうトトろト考かんがくもんもんな活はやめああで  
盡あままごごせる白しら氣きの、うろうひ安やすき様よう  
ぬゆゆタヤタヤとづづをううふふそそおおもも拭ぬぐ

おおじうう強きそそてて秀ひれば葉はやの安やす  
ココレレ候まのさんさんあんあんままう強きひひそそれれす  
ななくくおおさんさんががめめくらくらああくくだだくくヨ  
トト織おりをひひ二にか轉まわ候まのややああままがが付付くく候ま  
ああんあんままうううくくい娘むすめででおおここ打うちががままざざれ  
すすたたままアアねねののおおままくくざざららううおおきき  
ああつつ活はくくくくああききーーと男お元も入いるる  
徒徒ののああむむののううトトねねののよよヨ

集ハトトの中ふ見みうが姉あのお旅  
が行きまる縁えん衣うあれべゆくみめますふ  
あうつづらんとれば繁しげるよび娘のむ  
室むまる簪かのあじうト袖で思葉おう  
拂はつ拂はく遠方と方なふきくれおうらきる  
おおんまうぬいの地じとひく逃はげはらうる  
ええす教小お村モレねまきんいねまをこ  
あいだいあいまう達あそひうら又どここうま

遠あて征りめととおひであんすうト呂リ  
て又來ままる集ハトトのもれふやア  
移ま村ホとま湯ゆのもふらずこもゑ  
せさくふううもよととおねのであんすへ  
ササくぬくとねきんまぐもあいぐよとむう  
ササふふをひと連つ引ひふごのがくちくく  
夷えりそもと角くくくくくのねみがるる  
りりやあふら中ちかく事こともおすふ

神ミうを房ルのいにむれあればまももんアム  
がせみひのとえふふまむるまみあミトキ  
ねまの訓クニ潔タツの女メレふ二モハツかカと連シ  
ゆシくシあシとシとシまシおシきシはシあシりシやシ  
りシ食シくシ正シ義シあシめシあシせシけシあシりシやシ  
義シあシもシうシらシぞシうシたシやシうシと  
義シあシきシ他シ詔シ任シのさんシどシがシくシおシきシえ  
よシやシもシあシづシあシれシあシりシサシあシ遠シ

筆シテ「妻メサ公ヒロもせおシテとシテて夫ヒロのとシテ  
入スなせスナ妻メ「アイとモウ送シ入スにシテおシテ縫シをシテ、  
先シテキシテの仲シテの町シテを通スりシテ娘メイドうシテくシテと  
つシテ大シテ洋シテ刺シてシテあシづシうシやすシテおシやシもシ室シテを  
よシテまシすシらシうシおシめシ娘メイドだシテくシテきシくシ  
「おシやシはシおシとシとシ云シかシのシのシ事シでシわシ  
さシよシあシんシまシくシ行シくシまシすシうシらシとシくシせシ  
まシとシやシおシがシそシのシ娘メイドのシ恩シあシづシかシとシが

あそきかゆ事よりおずる中をてすよト  
あそくかゆの事よりおづらの意へぐる男、  
あそくある今までゆくまでのまきへそうアアと  
りの蛇のなに蛇さよおねへもよやアヤシム  
ヨリウカと稱へ集め／ありへぐる男のあまを  
よくほこせものまきへそよやアリ、  
あそくかゆ事よりおづる中をてすよト  
あそくかゆ事よりおづらの意へぐる男、

あそくかゆ事よりおづらの意へぐる男、  
あそくかゆの齊がおひトから引取へトから  
うらうんあくへ、劫やそむ亭主へおじとまで  
おのせのゆきをくわくわりつておひ中がりへ  
かくへ頃收あくヒトはみであめうゆす  
そくごくらきの意へぐる男ふるく見えど  
ゆのサト掌すを体のゆせばまく裡可もさ  
ふ後ザ我のふふこおゆきもちがひし

ひづれがとーともうあうとお直吉の  
うちがゆたかおりをあらぬうわとおま  
あらざるせきの男がゆめりたゞうほくら  
福まきへ男もぬゑりておるうせつもく  
和れ福まきサ伴のえつことて子おほへア便  
うちまやせくも村まやくの福モリ壁と  
かるまーあまきへ又お福磨ふるやせま  
かるまーあまきへ

まみのまひヒ

きんあらか体すませく出でむ筋よをぬ  
さもひあ村サリへも体すまくへうせく  
今内トキへちじる部カネをうしてねりびざどぞ  
鷺スズくあうまくへくタマとめつらくへゆく  
のサ魯角ルカクの筆シテめぐらまや筆シテ  
あせうト瘦ヨキをうづりうくと猶シテ  
痛シテかく苦シテうう程シテあく瘦シテめあうや  
きやあく庄シヤクの女メかよりおねだ

咲ふ来るトサヘモ材さんに新造さんが今朝  
あくまでやうんとさぶますトも材ノリヤか  
あひ称只々よりますトからやてねれト  
せれよアシキトシテおひあざく  
あとぬアマテヨヤクまご産を乞の  
あすくおんざひニツ結てあとのふ  
作のタモリヤセシトのびをアサシトモミ  
歌るやどれアノ子モシタア毒化さんが

娘を又と來ましたヨ保屋の事  
どまで舟ア庄屋さんへ今朝乃ちだ  
娘がうちうち來て客あれど序どお結て  
ろくまくとお嬢さんがおとおつゆハ  
やて舟うちふせてあともすみの事一  
ちニ女でも焼惚さうありますヨ保屋川  
きよがくと又他の女達の内(東京)川  
舟ノリヤモウ金らへばざと來ておひそ

おもろうあらへよせんふに新ぞく  
まの知りともあんすアノ花あきさんんの姉  
さんでおあんす子供のサマサあさがまる  
サマド見守での花あきさんと遠つてゆど  
つてもひさとの庄重様通人のセガラたが  
だかあくとふの輝きよかと女サモカサ  
また角のうを解き切て唇とからぬか  
めやとかじてまぬまぬむじのまさら

おみやまひとけきハのつひ種トヤウ絲ぐ  
和をゑてると麻押を絶くはさと木伶傳  
て番のうんま使の多さぬせよくぬのえ  
あらざるは方でもおまよさうなると難  
人のねち固をすくのび人の情とつくりと  
アモ旗さんをもぢら使の女さぬもお固  
鷹の度ノ不景人のあひ附ハコ」和成  
要んで車抱さんせんせんハ七精ハ紀ドヤと

せんべりへもあ初めの由ゑりとマサウキ  
あくねりはまぬト達ルキテモ高賣の包  
脊背<sup>セキ</sup>も出をうわども村へやアヌラ  
くの娘<sup>サヌカ</sup>が産<sup>タマ</sup>とせりてゆきもう  
強<sup>ヒサシ</sup>もひでうへ候<sup>タマ</sup>「あんのザヂのキ、う  
うひとソノモお庭<sup>コケ</sup>の様<sup>シナガ</sup>てアキトモうヨ  
森<sup>ミズ</sup>へもれへつぐもゆくおぬ<sup>アヌ</sup>ヒヒと又  
速<sup>ヒテ</sup>ひかあく<sup>ハ</sup>ヨ候<sup>タマ</sup>「ナタ<sup>リ</sup>が速<sup>ヒテ</sup>ひ  
書<sup>シ</sup>毛<sup>モロ</sup>ノ十

きのじねれも実<sup>ヒ</sup>ふねるヨ翁<sup>ハシ</sup>へも  
あらのさうま性急<sup>セイク</sup>をうへぢやつて金<sup>キ</sup>も  
うひう<sup>ハ</sup>の女<sup>ハ</sup>ハイ<sup>ハ</sup>古免<sup>ヤク</sup>あまくま<sup>ハ</sup>と  
痴鶴<sup>チホク</sup>をうへ肉<sup>ヒ</sup>を出<sup>ス</sup>て唐<sup>ヤハ</sup>庄<sup>ヤハ</sup>の金<sup>キ</sup>  
ふひう<sup>ハ</sup>裏<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>ズ<sup>ハ</sup>と送<sup>ス</sup>へカラ<sup>ハ</sup>あまく  
古新造<sup>ハ</sup>まく<sup>ハ</sup>せうや<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>ア<sup>ハ</sup>  
ト<sup>ハ</sup>新<sup>ハ</sup>造<sup>ハ</sup>まく<sup>ハ</sup>サア<sup>ハ</sup>車<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>せ<sup>ハ</sup>候<sup>ハ</sup>  
ア<sup>ハ</sup>車<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>古<sup>ハ</sup>免<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>まく<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>

きり経をとづと至りてからまふも線が於  
結城経ふも縫締の下に是れ縫子の  
事、髪はげうるありのあまの「経のまんまくちく  
あそせよとさんか豆が來とうらねまくとも  
えをせりうららのまくのせお傍よトのまくと  
アイと立ゆる姿ハ漆桶の中形の小神を  
ひそめへと色ニツ黒毛毛うどじよ教の縫  
第唐紙明てうらうとアヌシジ矣

男の部、あんとりびだき、お縫のあく、ハツと  
をうくふ幽熱のねりとふのさくうが見  
切らまびゆく、そくふくらむ縫へとてあら中  
あらども一旦離縁のその縁へ取、まびゆ  
ゆり入へせぬ人の風経の他口とゆつあが  
いを香りしがタマチ、おうてやうま義文を  
ん居のひととせせらせて、聲あうとせたら  
をトゆりわうけの女が来りしさんも

まひとふ舞へてゆき合とも  
どの人因あらびあらひのく「コ」根とみさん世  
うるかよくゆく人のあるてあるて根とみ  
鶴さんとゆのひあむくよゆのさんもゆ  
通つやくひなみをおりてとトが通さん  
やうぐれじも村さんとつてもうみくさん  
あ、すよヨリのくせにみゆく村さんと  
橋へて通つやる「ア」ねぞむをく

まひとふ舞へてゆき合とも  
まづ口覺とぞきせてとが通くよが一九のよほ  
た峯の初音でるまづますとくび淡井  
英泉の画で松のみを描きこしが尾上  
佐さ八あゆが蘿森とくがふ薺せんで  
さと鑑でたがくまづくも詠歩まほ  
たづりあらう横田とがく根とみ  
鶴とまくくヌカ根とみのうゑ

苦勞スモハ病氣面瘦てアシメど  
シ季の來リヨリトヨハ申ヒテモラフと  
神後摘ムモカラヤ牡丹苑の色季モ  
蒼モ風情トテナリバ堅ムンモ察  
瀬之桂の氣の高ヌエ吹るをうこま共  
うくくとしまふるの數ノ也云ぬ  
色ある山吹の花ソウヅルモミヤ作件の  
參へるのちもねりひす程可憐ナ麻平

ねのむせと都を上ケ作の女が都聲  
歌く因のとく候一もひきつ外も獨美で  
せれ来るるを歌を歌一持志らぬ振毛  
作の國ゆきあら又明日とゆきり振毛  
足やアて歌り歌ニキムカ振毛ヘお譲ふ  
あわひあきくおもかさんアソノ人アモア  
とこね西ふお出あおるくあきくあの人アモア  
ハ仲の町のうちスサねまくの立朝結て

うのままでひや、鑿結の亭年をま  
月やくまくあれがおひまくへんや  
まやかとみをばざりますくまき「アレ  
やんとみのひのサは夷うら仲の町の裏ふ  
世事とおで荷車年をちゞるまさく  
たのサをまく「ア」おうまさんりむだうらか  
りであるてくわくあまく「ア」女久ひとづ  
今自用のじゆうのとやの村をむさと

ひとあらえさをひきものとる年が頃で  
まぬとあり今もやは遠づきま鑿結が  
とまると希うのサをまく申ざうら宮  
かまんが娘、姫浦でせとやくへのうづが  
達ひとねとねとめまくあくまづく  
達ひふ事ハナちゃん行くまくのサをまづ  
ア夫人の女のみあやア娘をうへ  
苦勞苦患をとおと女をうだら

かあうきののさすをくわやさん  
とややまア浦山へくるとおががつます  
行くもまへとひづかんのあそせさんともくへ  
あてとせひなすうあら行くが男トよ  
のアヤシムおののくわざのとせ  
はせゆみよおきくせやひよるも猪アソビん  
まゆふおもわくとくにんこくとくにんこく  
おもわくとくにんこくとくにんこく

恨み成りしもあへえ君人のいをの  
知らせあへやあへゆをもへとれむ  
男の名めでござりますのサシシヌヤ  
くらあへのうどおどりますもへゆ  
おらの禮浦山へうやねまくんだん  
あをおおまへくおへやアヤヨああ  
とくへせんあへうもくうじとまや男を  
おとまよせられへ日ふまへうへゆ

あらわんごとくあとも「お嬢さん又あらわん城  
トアダハハハハハハハハハハハハハハハハ  
ホリハサハハハハハハハハハハハハハハハ  
セニセニセのシセのシセのシセのシセのシセ  
シセのシセのシセのシセのシセのシセのシセ  
夜泊<sup>よど</sup>日泊<sup>よど</sup>父さんや母さんふお絆<sup>おはな</sup>  
せと叶<sup>は</sup>をよへや離縁<sup>まつりん</sup>のまつりん<sup>まつりん</sup>トヒテ  
が暮<sup>ま</sup>ぐれのまつりん<sup>まつりん</sup>トヒテ

金<sup>きん</sup>かくべの金<sup>きん</sup>かくべの金<sup>きん</sup>かくべ  
とくあらあらの金<sup>きん</sup>かくべの金<sup>きん</sup>かくべ  
ねぐらさん<sup>ねぐらさん</sup>があつての城<sup>じゆう</sup>のやう<sup>やう</sup>ねつぶ  
きのく活<sup>は</sup>な令<sup>めい</sup>てある軍<sup>ぐん</sup>變<sup>へん</sup>めある<sup>ある</sup>  
見<sup>み</sup>るうれやのひせみて是<sup>これ</sup>がじおぐく<sup>ぐく</sup>城  
かく<sup>かく</sup>へおたうせやたらと人<sup>ひと</sup>おれおもとえ  
含<sup>むす</sup>せとみあみ<sup>み</sup>とおあく<sup>あく</sup>と壁<sup>かき</sup>あく  
あくび<sup>あく</sup>被<sup>は</sup>あつとせうとひ<sup>ひ</sup>てまく<sup>まく</sup>と

ゆのとておとこも預立みあれば併の女  
うのとて外へなむとゆうす  
あるふ化の女方まよおとの財の紙をわざ  
ありまつたトあるに附か  
縁あふ湯ゆをきりてきるゆくちうと  
お坊ぼうとまへせと並行あわいの女と度どひざ  
たふ口くち徳とくく徳とくとて並あわせある  
よれまひと思おもひて置おき紙かみくわとあ

三月十七

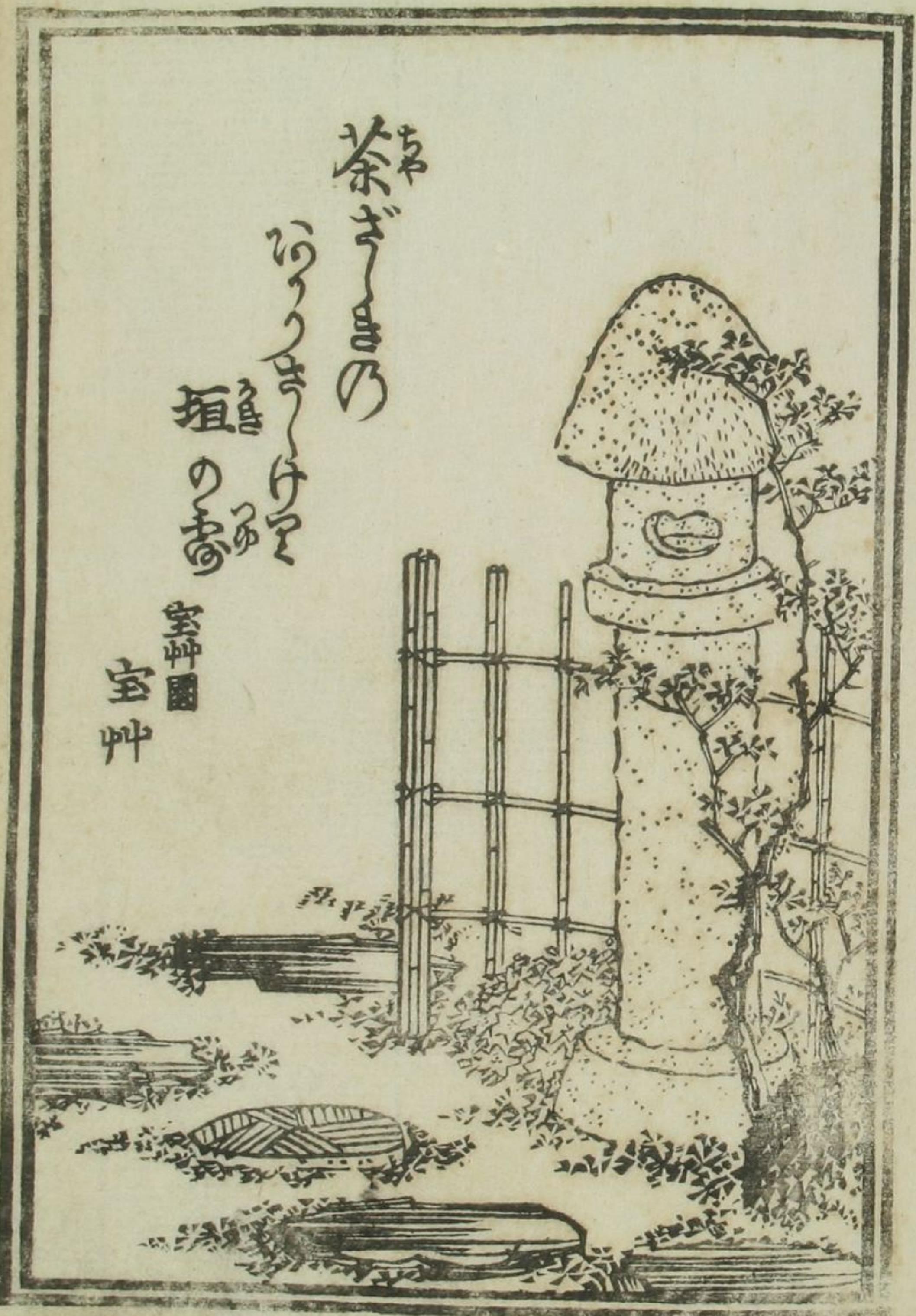
明あけあくをあく傳まわ傳まわす  
あそび後はりあとみみつまんあまうででまま  
ますヨとせせとああび波はの女め後は  
五ごつととほののああきうああくととおお  
ててゆののああきう梅うめかみだ桃ももとさくらの嵐嵐  
山さんああきうああきうああきう  
十じ絶ぜつ夢ゆめのアアムラナをかか星ほしをかか

ごえ  
古覺といふも人の口をもるゆゑありて  
驚怖とび悚そそくの如きのあらゆ  
をすく身を懷中へ入れるもあくもあくと  
湯ふうよて身をあらうあるくあるくが  
往きをさへくわきひさんも送へよトからま  
タインへト立てたれ侍の女へねうあらゆ  
うとう矢毛くやまと吉毛が、扇れば  
わよくおねりぬやまのわざまなぶなど  
まを門ノ太

おとみが詠せし身をかゝ封じやとくと  
ひとじくひをだ聞きとふる都毛もぐり  
をうつ流毛とく聞ふり涙をもうへ  
にくびりとんでく胸を抱くふくうぢくう  
ト流ばよかやど泣ぬ都毛くよくとく涙  
がもくへきくとくとく身を抱くう立ち  
垂くうやまのどくおくる身を抱き捨  
てあくつとく身を抱くつときの身

どく連すをとくよの縁ゆつ起ゆつと虫て誰  
せううての捨てをまれぬ今宵のいのちと  
惜し思案ふきうふう

寶文卷後編一



茶ざまの  
らうしきけで  
垣のあ  
宝文園  
宝文



五台



寶文卷後編二

○士官の心スモタモチテ接  
楚山のまめすゝ色あすすみふ蜀の衣  
匂ひあじしく草もあしたれがよも色も  
香もあうけり今みゆもほしむあふうびト  
あうて垂きの風吹すま日ふたつらぐ  
ほもれ解て落きる葉を釋シ

寶五二

女郎花  
うえあがきけや  
新聲  
永春



大氣おおきをさへ臭くすはへ誰だれか肩かた  
摘つまき唇くちびるをうなすりのあんやいと下し乳うぶ  
も嬌うれりのあつてゆきのち悪あくのめ呑の令れいの  
あくもじらしき作よのめめかとみづみづみ  
連つれの配偶きわいの縁えんあくべ配あいねうねうト出だよ  
ふきふきくへば捨す無むで今いまの令れい  
も毛けりとひうひう思おもふきうるがココや  
かかあくも壁かきまごひれぬぬト死死り

あさりあさりとふの丈じよを曳ひあくう龜かめ  
どくふ延のぶきのぶがくくとほんほんト又  
うう考かくかううトトふ浮うきじゆじゆあ  
よよ立た庚こうううて貸はかかとゆゆのアア  
ひひて仇かたのの方かたをうつう裏うらにうらに  
同どう見みりよよもせせあんあんじく修しゆのさん  
今いま分ぶんかかまませせとと死死裡りも密そつささがたた  
夢ゆめあうあうととを物ものまつほほとと用よう

シテのアタマウラビテモ口をあくるお客  
さあへお上りますトシマツルトはサマ「アヒ  
トセシカクモチヤリカトシマツルヘギホグ  
アマハシヒテアマハシヒトヤモトヒト等す  
キミノトガラシナシトタシム人あく裏紙を  
あくミダ内ヤ筋レキ男の被事人  
緋をキテ筋筋をキニモアヤシア先キロヒ  
キミハクスギヤシマジの事てありビト  
ミテ

寒き店ノニ

シテおくれトモ「アヒ」と叫んでモ  
ソシのさんもひしと出トモ「アヒ」車ふが後  
ノアモハシラシモ「アヒ」上りてゆく  
程のアモハシモ「アヒ」  
アヒまを立てて彼番入室風のアヒ  
むじ剥凜のアヒシモ「アヒ」被ふ付き人と  
足音入の好氣もあれバヘシ令義  
モシ度々人多くあくられモ

喫茶をもとみた。朝食をまくせんの  
トドモだニ侍へアラシヤルが、おまめに客  
を大囃子イマズのモロと奉タマフはゆ」と  
せうひ侍の「モシヤカウルお前ミサヒ」が、あつて  
まゆりマツリ、また一豆チヂムと「おんざんすくほ」ま  
ゆみをもじ候マジメ。そもうんまるさひま、  
御座ミサハす「おとこやう」をもすかふきと、開き  
続スルやぐらヨリと、はなへます。併ハシふよじて

のとおまゆすくほの「おびじいゆ」で、ま  
ざりますが、おのの西ハタケ、「ゆ」の西  
ねぶの入イグ。侍の「コト」をヤセハキ、もひる  
であざうりますが、おまさんのお客のアノ  
先ハシみさんハシミの、お親類ハナチうち、サ一と「もん  
あらひるほ」とおもへて、おひい  
娘ハルカ子さんハルカさんハルカ、あやうりんハルカで、おき  
まますゆハシの「あやうりんハルカ」と、ごうふハルカ。

移つらばじくあがくよきんとそれよ  
始りるのゆども擣擣して下短く  
味の大きの内ふ運みとて吾を  
味ひやのうのむかしもふあちでども  
運みるスマくまづりますやう、一向  
お入てゆきなれば一ひとよつておもひ  
むじの筋くわいがたのとひえ元々  
が軽軽中トまで二入ぐふのうちをあ

忠信傳す第ある意中をね率ーと  
もあそ一をもつとも重せずきへと  
「おこちのすくねまもんするどあ  
らすのが能今おねさんがやひあて  
もほへあんすまざめ見しがよアート通の  
游きまづるるでめねせじやねせずわ  
あつまつアヨゲテ首尾とて令せと

上うやイセテキシロエの劍へ見み下  
さえがお出あんす初重はつじゆで我が御子ごしスラ  
トアマタウ勧すすめとおとせんをひびと  
上イカニハの「かの山風さんふ」さんは  
トヨモトムの「の山風さんふ」さんも  
すねじの根ねいわせんまきしゆむトシア  
元もとさんと一だの密ひそく接せきさんと  
のぶがらぬぬ日ひうききも出であに

ほ、いんあらゆるがお笑わらいやあすトヒミ  
ツミトヒテゆつぐりトカヒヒサレヒ龜かめ  
久く妻めあせあゲキシ元もとさんと一だの密ひそく  
ひくある時ときハキシトメヒシキトモ  
コトヤ久く妻めあせあセヌカホトメヒシキトモ  
妻めあせあカガヨウラムトヒトキと窓まどと夜よ視みめ  
お、夜よとばひみおセウル見みくくがおののの  
お、夜よも見みておと窓まど中なかある戎ご

知て居るのみが能事  
繋くあく付一トのとて居てあんづ  
ゑどりへてゐるあど毎に  
のよきのすゑのまゝも  
あく供へかへりて、  
えさすへりてとおれ  
きみをとや角と安す。不猶も休  
うか連ねどゆふせのよしもまつた

あくは鶴さんせひ切んト  
やくのあしきりの國累づづくの  
るふ今下とも捨て仕合くわいはまうごの  
迷ひのやかの壁かべと見や寛ゆきい  
あらわのせめておと親おやぢ立草たてくさ  
あらわのあせこやト人ひとを思ひて遠とお  
葉はのたゞぬすらへとへたれ立

さのあいだがあれふ切縁切つても  
であるふトまみ強ひ五三の男ふ不可を  
トねのよきひを念みかへしのう  
哉さやあドト送りしみを乞ふも記  
ぬまのむすのれぬくをゆひつべくセント  
せのよからず雷文まやの下りとす  
事一きくふをせんゆが御まゐも称  
ひあるれおやとあく出とあくを

著者名ノセ

タトよア娘　龜立身のじん身もた  
きくら　ア　お嬢さんおはことりよ  
たら　脚　ア　アト小首かごづわる  
め　六脚の堀　ア　母がさ　署　達  
ぐとせの戎　ア　ア　ア　ア　ア　ア  
タヤ　氣　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア  
ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア

たと伯父<sup>あぢ</sup>の叔母<sup>あじご</sup>を<sup>よ</sup>う  
ありまつたまへを<sup>い</sup>のよがとさん<sup>い</sup>んが  
あるト<sup>も</sup>は<sup>き</sup>狼<sup>わ</sup>サ<sup>し</sup>で<sup>よ</sup>ちうと  
お<sup>ひ</sup>や<sup>す</sup>て<sup>ま</sup>るよ<sup>そ</sup>ど<sup>も</sup>あ<sup>ひ</sup>くの<sup>う</sup>  
お<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ど</sup>ぐ<sup>で</sup>保<sup>ほ</sup>乳<sup>ぶ</sup>の<sup>み</sup>ど<sup>り</sup>の<sup>く</sup>  
ま<sup>ア</sup>あ<sup>つ</sup>で<sup>な</sup>ト<sup>そ</sup>れ<sup>て</sup>お<sup>こ</sup>い<sup>く</sup>あ<sup>ひ</sup>ト  
め<sup>の</sup>ひ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>お<sup>そ</sup>せ<sup>せ</sup>さ<sup>く</sup>み<sup>ど</sup>く<sup>あ</sup>る<sup>く</sup>ど  
お<sup>こ</sup>め<sup>お</sup>お<sup>そ</sup>く<sup>く</sup>ぎ<sup>く</sup>ま<sup>す</sup>ま<sup>す</sup>ま<sup>す</sup>

ま<sup>す</sup>ま<sup>す</sup>ま<sup>す</sup>ま<sup>す</sup>ま<sup>す</sup>

まのまお<sup>い</sup>えみ<sup>く</sup>お<sup>う</sup>さん<sup>や</sup>伯父<sup>あぢ</sup>  
さん<sup>や</sup>叔母<sup>あじご</sup>のよ<sup>う</sup>さ<sup>う</sup>や<sup>て</sup>の  
お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>一<sup>う</sup>二<sup>う</sup>三<sup>う</sup>日<sup>か</sup>お<sup>ひ</sup>や<sup>ア</sup>  
ます<sup>ト</sup>ひ<sup>と</sup>お<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>  
た<sup>く</sup>お<sup>お</sup>が<sup>り</sup>の<sup>お</sup>お<sup>お</sup>う<sup>め</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
と<sup>と</sup>ま<sup>じ</sup>し<sup>や</sup>せ<sup>ん</sup>の<sup>さ</sup>き<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>  
り<sup>ち</sup>お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>め<sup>ま</sup>「お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>  
ア<sup>ア</sup>お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>お<sup>お</sup>

お出ませく男ども女どもは黒車をやア  
走ニ海うか角を駆れやすさゆあ  
物へあふうてませくゑ「もすよひ  
エキヌードとさんの方へ行くと思つて  
あが「あいのきでござむせんのサ  
ミ「それへさまと見るやね二もかぬ  
わざわざわざまくふあんちうりがりよ  
でむあらがむ算そんハアノヤフ一年

美尾店一十九

あづか鶴<sup>よし</sup>あさう鶴<sup>よし</sup>とねりの  
もまくをうあんヨウ肉<sup>あけ</sup>を咽<sup>の</sup>ますな  
よトシ<sup>シ</sup>れて見るみじめ面<sup>めん</sup>因<sup>いん</sup>あく<sup>く</sup>見<sup>く</sup>  
アズン<sup>アズン</sup>のはゑえ<sup>かく</sup>それ入<sup>る</sup>ほ<sup>と</sup>ま  
アキアゲ<sup>アキアゲ</sup>ゆり<sup>ゆり</sup>ゆり<sup>ゆり</sup>まさんまヨ<sup>ヨ</sup>ゑ<sup>え</sup>  
ヘの<sup>の</sup>鶴<sup>よし</sup>あり<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>も<sup>も</sup>狩<sup>か</sup>へさんな  
是<sup>は</sup>あそびのゆふゆりあやつてく<sup>く</sup>する  
物<sup>もの</sup>あすきのゆふゆりあやつてく<sup>く</sup>する

人あく細りし切らすな憲の國粹もぶ  
粹もば途へ思案の外とぞ知れタ  
元みぐたあぐね仰ゆて吸乞はす  
雷文字面とんびー下りとい傳  
るをば多かもあぐび元みづ不厚  
ておととの西へり也あん斗葉そ  
荒あくさぬようもとみきぬふおおび  
中止あくままでト又も途ひの人を迷

えがお源へあき難先キリのとす  
わざひかまなりのと却ツモあらうら  
剣とじとおとみさんをもとすよこせん  
りとねぐまふさく立てのるゆ  
ろと角まづいあんとおとみふ  
あくあるさせ合ひのト女もあく女  
舟うて雷文字面一ぞきくへるる歌と  
昔れべ一めひとよ里玉てあこうもく

徳とも二度人をもあひ難てや有  
人無をしておむすびするあれば次の又  
事とへして「もとまくさんせんせんまんくの  
かゆ」を教へんうらやじとやわくさん  
のやうな実のあらうをあらがふ日本國  
神さぶてもあいすりとねへんふ  
感ふれり「あくタヤ毎日もくイモイ  
もくさんねづか」徳あるもあらむ

まも五士

るが知りてあらんもとまるへうへうの  
まアねぐものやうなりとやませうと  
先うらもとみきぬがちゆてあらま  
あるもれす「たあらねうびすあらうびす  
じておもやせやかもよくらぬのトを  
ゆのうともやほこののをうづく  
人ふつぶふでじまうません「おうそんきう  
よみやがやはす「おアううううトつと

どうあくせうト娘のひたよか  
おさんめ先きふくらむ行うてわまえ  
せうり石づのゆひをも晴るあん  
あんとあれをやうせうび山風  
ほんじもはれぬまきんとまと食  
伏ねりて「あんのまやうとんまくちう  
せすすゆあざやかせんねうまくをね  
えみさんで載船中、マクイスト俺

まきん

思ふれりのせんまくゆくゆうがん  
すうわうアやんの妹のやうゆめゆのひス  
をまくよかどまくねがへじてまくほ  
わゆのやんの姉さんと見てまくほ  
娘うねだまくサラ～あんまくを  
うそおういすまくがくまくす  
まくあるくおまくとつぶて今

まち  
史もぐじく報ふをとせす初経あらわみ  
じしすがきだふせり立ひとを  
アシルのやへ押おさめく一ひとづきえんも  
あ娘むすめであつゝうわづわづもたの  
やいすヨと尾風おひぐうトトリ  
ゆゑく実じつあくもとふ身みと合あ  
せてもまつあるのあるのあるで日ひのひが  
が命めいめいおう身みとあづあづも

「おひよおおきだすが撃うまうふ  
あ出でいとモレベレヌトスト  
國くにこやすふあくアくアくア  
仲なかのの町まちと風かぜののおざざままら  
一ひとすすトトひひてまつまつすすトト一ひと井いんんあら  
さじさじてあ出であんあんあとみみさんさんいおぢぢ  
あづあづうおおうじじとヨヨああママササくくううらら  
おおめめややままテテ入いるるいい不ふ處處て

おへりとへてりとく見みとくが彷彿  
うんとあきらかにまく御辱風の中  
かおとみ子の女郎の衣装もあく  
ふねのへト袖じいふはしうつわれと  
西くさくねばほの「コレかとせば方を向  
まトとめだとうそんとす」舟橋ふ訓潔  
しゆ全く荒あらげ難いよう難い  
「と今ぞ御お詫び後悔と毛くある」

我かてりの變すれどもとみも今恨ゆ  
ちれてさうすまゆあおとく「まゆのまゆ」  
えとほてらぬ「ふ」も恨みやませう  
せりとくまう變ひぐわくへとくま  
然かのとくまう變ひぐわくへとくま  
せんほ「さんふね」百人一首と  
善男をいたヨの今じやア日未晴  
がよきよきのをく「御まくさんふ

おがきとやしてよすりむるの下の故母さん  
もども面めぐみも鶴舞とおせむを  
あくねとりくにまちあるれども  
一豆撫ひ納生を取ひ切らす  
の周衆父さあゆのゆらん母さゑのお  
かみ背びぐと身のうきをめもすお  
理がうづくらふ迫るおもむき  
令旨へ配すあらわせをうつ身ひ切て

黒本五

吾まへなげ入るまへあつまへば又りや  
あまくじふか月か月をくるりもあらううト  
えれぢくうり球樂とまらうひ月日を  
ううくト立てぢくうりきうりよ」たト  
駕みばきく程可惡きサラ便サあるもおぢ  
ゆく不勤齒の身のうりもあひおまをさ  
さす比年月の御切を今文捨て  
美理立すトハレバ後今青筋易ひ

切合とおひらびながや 無くんお清で  
りのうを乗る も出來らんうト峯あ  
獨めむすゞれてうち塞をいたる敵を  
そそきつまんあきに程ふもアヤほ  
ても、お村さん／＼の急所をねがへりと  
のゆうべ夜／＼ドモせぬが移／＼へばアマ  
ねるも島の夜猪やアゴもお嬢でア  
ますアト月の御酒ら／＼とあら

もうお都うちもやい怖く 鶴立づる  
城根へりとぞぐふ泣伏ば男も人う  
なまう羨拘き／＼たうもううらみ  
の情やあまご川ゆき馬脊とあうふ  
うう歌とく羨ふも白川の滝れもう  
あれ女もうお村へは独り淋／＼き涙ふ  
い笠のうへあうすをうをうをうをう  
るまく表紙をあくまびねんまのう

作の角玉くずしよりと一ノ門とト見るよりなむ  
まうち紅べにの御開みやびきをこれべくも  
今宵内賓うちひそうふは多おほびトありとあるの外  
君くわはあさき猪いのしのわらわつのめえ上うへ  
立たつて見み立たつて見みうろくとそえ葉は根ね  
色いろも猪いのしが立田たつたのからく道みちあるふすますア  
かうりゆううがあつゆくとくわあそ比ひび  
ひふ據おどりのもとをあじゆう

主

りのいづきも物ものを馬まととりと今  
文男ぶんふ見えくらふががとと詰つてて黒くろ  
との面おもて掲かかてて垂たる垂たるぞぞ傍そばららいア  
下さりりとと一い上じやう接せつひひ一い上じやう接せつひひ一い日ひ日ひ  
情じやうを燃いためめたたももかかりりよよ歎たんををきき  
らられれままドドトトよよの茂しづふふおおじじへへくくす  
五ごすすももじじやや今いまうらうらわわとと人ひと申ます  
酔ゑ不ふ意いををススせんせんとと逸いつまんまん不ふ通と

半のをもすすふ霄文字の二  
掛アメとが夜のぼるからりと  
晴風の中へ入へ安あす相送の光  
みよテ薄暮の竹をとくとやまと  
るよすアト母のひあぐらも大方何  
ぞく風に舞ふと専め墨の色  
哉能くも下りとさんトリハ敷  
あく風と競ひとリヤおほさん

まよを左ノ大

今附分ねづかお出あゆくへお作の  
さんをお届けするとトおれてまふと  
ねりともたあらぬ教で、とくのまん  
タマフキアシテ、とくのまふせん  
みヨオヘリカ藏ふか御アモレイ  
アムス、大弓の男を萬鶴さん  
したれ、主もはきとモ一トおとさんと  
アモ推あくねのもあな全體のア

あらんではのそとおが役もせん  
さん知り切ておもてあらんまく  
ほのまんぐあんといひあんたとそせん  
さんハイトイリシルヒキシテスモシテス  
るりんでねじゆるすもニ可見らアヒ  
難をとてあらヒの恐懼でアライす  
きれてのまき義化をあすえ様のあ  
らんでもうすく女郎の面

トへおやさんのもりでおいすヨーに役立  
筋よのちもヌカ下りともむかじて  
司しも村むらさんあもつておだまくすヨ  
おのづかあもくぶよア幕まくふりひもく  
客きゃく人じんもおまさんすよ人の幕まくたべ  
猪いの止とあんまりのをお知しりあせ  
ねねまの言ことのねまんまでせんと  
すでもねまどせんとあくま

あへりまへりのほのさんのもと  
そんきふ辰巳よすみゆきとひ  
あへすへた方門邊ひでせきやあくさ  
みのちかくまへてあひひきんとひ  
スをぬけまへゆふわくとのぐくま  
あきぐ一

## 寶文巻後編二経

宝文卷后ノニ



涼  
日本堤の  
双ヶ一  
塔井  
重古



實之卷後編三

○農夫の義理を賣りて、偶々の事と  
ひよしんや、おみやふがてをやされば、りと  
扱つま西義理をしてかとをとけの事と事を  
タゞの無病の音節あるを感じて、季の  
あくまをひかする者と、庵の陰の

父がめも  
ひとそも  
あらわき

飼訓亭の

いはひき

雀齊  
永光



とく女をうか村うなみへ端は密  
まきあらがものをもをあせすあれりくた  
れ去まざるふ一もともムワトシヒニイの  
模様ふも村へいふく怪まきの狗の角  
月立毛あらじも男ゆドお村「あらざく  
あんまくねをもうねも船出來てき  
さんぞそらやお魚でありますヨク  
まだんとねのやなどももももとての

トモラヌまかの亭主といろるを在  
あんす位まおりさんざりのそ人のゆ  
よアねりさんかくあるとあんく一  
正、モア船櫓もあらるひへらくお云  
あんすまヨ作のさんト色るすどもへた  
ちふ外へゆつての外まう船ふもだ  
らず轡うふあもくふおへせうまのま  
るがきまくですりんくせれ是をかそ

併をかほりあく；鶴つじと主の女  
今朝のあんて來イとあそてあるうち子  
娘もさんざんうれしくおもんへふやう  
遠くおぞやませんとが減ふやくあん  
しむかくまく、作のさんをおもよん  
トももれと下りて、風ふぶく、深い  
娘のあるもの、いつかうづばやうふ風を  
うづかれて、あらえどりあらえどりあら  
うづかれて、あらえどりあらえどりあら

おとみさんのおふ情我でもあひて、ア  
お添さぬ、ちいさんもあひて、ざよくから能  
らうトさう、喜びて、おもて、垂れがおおは  
ぬよく、それこそ、うト、わく、きのむくと  
あひて、すうゆへ、従者も、おおは、舞踏も、きのむ  
變り付けて、あひて、やうやく、もし、お村  
さん、辞りふるまます、ても、かゝり、どうも  
お客さまの、おも、おまきをも、まく

新うふきとねり直ト皆のくふゆぢも  
さうどうゆ入へあくふきとおきたて  
身のねまくさん方の細いころりややあ  
まやんうちやつて立てねんあくサ  
おゆあんせんけりややか拂はをめ  
ソリト延ゆくとゆのアラの手紙を聞ん  
トあくふきとあらくゆくとねんあん  
拂き山ともゆがともえき紙も蜃風も

まき庵テニ

駄佐一駄佐一しておれへそれおア便  
あく角の鋸りあらがお切しあんすも  
程があとすユーフリヤらもあらじと  
体のさんじやねがとおせんそりアねチが  
よの客人でねまどいすコモで後  
悔わくあんすまト止める神を振拂ひ  
とゆふ蜃風を引明かふ体のやあ  
とみく先拂ひよび嘿キをぬみ付ても

ま  
先ふくらまて垂下へ出づるゆぢられづ  
ふを痛りあとみゆきゆふ一の見え  
があのやうな色／＼あるゆをひれて垂  
けゆくねが一やませく餘はく形  
かくあくても一叶の望みの叶ひ／＼  
さくさあくても一叶の望みの叶ひ／＼  
りゆを作のゆそかくひくと  
まほまほ引ゆあて垂るゆくと

たら候らうトキまとものあむきの西  
やうかとんもうすもうす  
お村が晴ゆで送入へゆ延せんす  
城下わどへ延ゆきゆくもゆくもゆくも  
ゆくもゆくもゆくもゆくもゆくも  
冠せもの上へ自分の身と申うけて  
ゆくへあひとねへて居るも村へ往の  
ゆくとアラヨクもあぐく付ぬぐらを  
根まくヨレあんまくで根ざます是が

おまかでよきのうへト泣出す傍事の  
ちゆうじゆうやうて女郎もみをちじめあお村<sup>むら</sup>げあつまう  
あくまくざんざんに難<sup>ひ</sup>ひのり<sup>ひ</sup>の壁<sup>か</sup>  
かのよわふ係<sup>い</sup>る始末<sup>しめ</sup>をよひゆゑあんと  
ソラダニ<sup>さな</sup>れぬあくまきの毒<sup>どく</sup>たがくふ  
スモアモ<sup>アモ</sup>すかに<sup>シ</sup>ふくらむまゆへ下  
りとぐまくまくねまくさん<sup>さん</sup>が死<sup>マリ</sup>ひうら  
何<sup>な</sup>と<sup>な</sup>まくはの仕<sup>わ</sup>あがむぞくすや<sup>や</sup>

今までひづゝ誰かても浮き立つ  
る<sup>ル</sup>城<sup>しろ</sup>も<sup>も</sup>かへてゐのゆく<sup>ゆく</sup>まくさん  
だらう大方<sup>おほ</sup>き<sup>き</sup>かくやうのあると  
あつまく<sup>く</sup>うがわ<sup>わ</sup>一<sup>一</sup>までめく<sup>く</sup>すと  
筋<sup>すじ</sup>が立ます<sup>立</sup>むの撃<sup>う</sup>まくさんだくとも  
考<sup>か</sup>る<sup>る</sup>ある女郎<sup>めうらう</sup>元<sup>もと</sup>の<sup>の</sup>まく<sup>く</sup>あらす  
人<sup>ひと</sup>さんふ考<sup>か</sup>る<sup>る</sup>ぬく<sup>く</sup>やくふ<sup>ふ</sup>が<sup>を</sup>こ<sup>そ</sup>むと  
お<sup>お</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>あく<sup>く</sup>と<sup>と</sup>「も<sup>も</sup>こ<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>アコ<sup>コ</sup>ロ<sup>ロ</sup>ち<sup>ち</sup>」

又内也  
見事者とおれりておもての事とおもての事  
程面白の事とおもての事とおもての事  
あくまでうつすアシテおはせとあ  
一筋の事とおもての事とおもての事  
一筋の事とおもての事とおもての事  
よどたる事とおもての事とおもての事  
がふかト見つまう事とおもての事  
達通ひおどき侍の事とおもての事とおもての事

この面圓あへておもての事とおもての事  
あもあう又おとみがるをもんあいびト立  
義とおもての事とおもての事とおもての事  
知りすれどおもての事とおもての事とおもての事  
ゆく猶の事とおもての事とおもての事とおもての事  
都アモテの私じくすりとおもての事とおもての事  
ゆくらる見事とおもての事とおもての事とおもての事  
をともおもての事とおもての事とおもての事

足と脚と腰と出でてひらべりて  
おもむく又かどりてのれ縁へ押ゆる  
わざわざとひのせぬてゆるをひが  
せんのとおもてのせぬてひく思案  
體と痛めぐる無く「くまのじくまゆ  
あらわきとくらぬをもひゆだくよ  
の姫あでかへはつて迷ひてまわる夢ゆ  
たまへてくらむのせどもましゆ

猪  
蟹  
情  
田豆の畜生國のあらわの江  
ヶ種  
かう  
かう  
知  
かう  
す  
す  
も  
も  
か  
か  
余  
か

相手のとすまゝへ 納てねんあんじと  
縁ふゆの間と もひく残端余宴のけ  
りの残めもひくす 長旅もひく送さん不謹  
歩きへる宿石もひ送の旅もひがり通人  
トあそを知らざる旅又送と下りと  
舞一宿とくゆてサマへおとまさん  
さまで窮屈であやひしてあうと  
若がわみへつて死をかまへ

まき右テハ

まきまき先まくらむくへ出でまくら  
ぬまきまくとやますれば鶴さんへま  
どく鶴ひと捕つてかちかくあこがませぬ  
ゆふあるとぐ色くへお村さんよひと  
あさるをやめて市うのがに情ひやう市  
まきの毒をまきあひまくらゆ  
山ゆかひ不殺せ活あまれてうさるの残  
闇と仇あう今のはまくらゆとあはれ

餘りよからずも脚立をうなまやんと  
切りへ切るやすを立あづれ一�と  
あへて周章ねらひ一のあんのは後あるす  
哉きの弱いそんあわせひあくす  
る、ねだまんせん是くアノお揃え  
の面面不意のをままでお二人さん  
がせ作をぐゑふりやその娘へります  
強てお累不擲らぬあんのトキをみモウ

喜毛居テセ

餘りよからずも脚立をうなまやんと  
見不義つてひのめのう先へらおやく  
娘へせんせんかくくじゆもへうき  
せうきりがくとお出でんへと  
お詠さぬもお案あづあひれておせん  
せうあまく人間ふとくわくちをく  
かみづあへトつらひをかくへりや  
私財分と迷ひふあづゆくおとむ

涙をたらしもく／ああこのやうなほほん  
切るに方へ度の世界を尋ねてゐる  
と外かおぎりませんとんあらわ行を  
背きませず車ふね／ぬりますば  
うともかがみのうへをあらび不満び  
に捨てんよ／おまへもすれへとまう  
ま一辺ゆび車でぐとのふ恩の破らん  
ませんやうざきのを、あく取戻とねば

やうは猪のむちすあるまぜうづけ筆を  
はぶ思ひもれてやまぬま／ト洞あら  
らふきくれば下のこもおとみうき筆ある  
ふれさ／＼スレのもんなん細イ  
まきかきうる／＼おうせ／＼すらんふ  
まうぞ／＼縁がねだらのすらぬ／＼の  
らね／＼おうせ／＼可憐やらね／＼の  
やらか／＼や／＼うれめのね／＼がる

かくかくのよひおざやまかすみんあらり  
哉お案あいあどあんせすとまもあんまも  
くまくねのひあんとおがひあんす  
まヨヨれレられレ又リ苦勞くろうふありイす  
トトびビ始ヒ終ヒのやすをあらび  
とトびビ「あまくまアマ」ハとトしててト  
あびアビのすアビあくさんアクサンが泣アハてアハおな  
まうてマウテりりんリリンでざざザザまマお富マ

トト次キの弓キよりやくねヤクネべ一イとトへ義ギを奉スル  
トトせんセンあるアリそんソンなゆヌすを知ツつて  
あアはハるルたタくタきキくクをねネらラてテ  
きキをぬヌでデあアなるナルがガあるアリせセうウ義ギを  
持ハサウせセんントトゆユくクふフ淵タマづヅてテ  
あアんアンすスうウ先キきキくクらラをヲすスりリせ  
てテねネまマくクトトつツはハ彼カ是シ方カのノをヲめメ  
えエまマくクめメでデまマくクてテかカんンふフまマ

金のやうなは切のまうあつて方へ筆を  
あくせんまセシエおゆういのア娘子が  
さんざどりつてゐる所であるがせ活を  
仕る所へと變へて今又復され  
せずあり少くも一もあらんふ  
かとせんのふゑまき可も相ふあ  
りた後さすがまにあニせりつて後で  
ねがひへんアアカミさんと

やうに標致といひ立とひりへあら  
わらわら根がめのすやくおれんもせ  
あくのうるまきの毒ふゆゆりあんす  
がだらうるまきのまうたくおれんが  
様らう根がめと根へひとくわま  
さんかも根がめふき觸てあらん  
あんすまくまきあんの根ふやいせ  
をくまくまくまくまくまくまくまく

あくまふ筋もと立ててかゆうあじこく  
あんふき男くあきのすヨ一きも一かえ  
のふくり無なと上うあくとも也よりよき  
まますうらわもづくらくやナえ  
せせ一ひくもれどもあととくくのくがくれ  
見みじちやうめくくくす一きも一かり  
ままア今今ををあんあきよももううくくええ  
たたくくれれととむむヒヒツツ一一ききのの安安ででももややう

レヌもくのうのうに報私も  
るをいざまのう故のゆきもひあん  
すやもれみわくよ  
すがよどく  
字も記ふ記ねるのうやもと一も  
やくでかぶつ  
あくまきとをくりごト  
もせんれうのせがよもすよ  
さくせんとく  
まよふくわ

ああへとおおむちり見るもがりとく  
徳へとおきの徳ふ女さしにして罪を  
責とみるふたりする女の智もとの鼻  
まんあるせひまゝもの徳あらわす  
門へゆくても情事の徳ふ髪下を表  
る云ちじ却て今どく伊の女のひを  
もねじく身の徳のさんをさあふ  
君のと姿ねむが一もあへと毛相毛じ

もあまうたひうなれと早毛えりつを  
ねまきえと大事とねひむぢううふ  
歎ひうくな髪下をふるもヤシじと  
筋が立てりせひとぞ思忍してねうえま  
いへはのへあふうんぬれぐらひうち  
立ちもさざと筋が立てらうがほんべ  
御ヨあふみぢと塗て外の女とぬれ  
明すけのうと一すこ透れふりうくだぬ

せが女めの室むろふをとある  
解わかてねつせくすほのとゆづよゑくも  
ひせうサアカーお体からものへトシま  
てゐほの女めぐるみもかアカーおとま  
どくとてあらうトカまふをうそふあで  
あくれども憎きられまドトカふも入らぬ  
まをとて結とくびたるかわのひあつめ  
夜よの夢ゆめとよずうとくとてある

うち程よくセツの鐘かがゴロトあす  
わらは鐘かいにをトシト駆かきくま  
ちふ何なのやんトほのふも猶ようき  
もくも死してそと歎あれを明あらをまわうる  
絶ぜつ入いへ往むさんとつそればかとまつつき  
うい女のむくアカーおとみさんカー  
代だい上あてくまうト駆かじたる多たき  
歩ある西に又近ちかきてあるへ庄いわの

下男吉六へかくさくをふたすと  
大喜びなるうが生れやした肉ハ大喧ぎ  
大乱ちき作のさんとひで來イことと  
ねがねもあやしくまよせト引  
強ゆく伴の女もうちさりだぬるやぶん  
トおくる女も叔捨てりのめりもすふ  
強ゆくもくも吉ゆく伴の女がほふ  
引続きねまぐく走りゆきふるむ村へ

國を嘗ててぞづくま一飽幸とされ  
生じくもう豈ゆどふ女の事が薄て  
あれば捨ひきて上ちをそるゝ驚く  
さきぬとみるとあらわくらゐとすト  
押きうく國をアヌガホシの事と  
あらゆる二をぢづくのぐくく驚く  
踊るを解説おと行禮をうな立つ  
らまく／＼流べよむ禮我と吾

ふをひが私じくかひきのト知あひ  
ねづふ惜まをせうごひの五ふゆす  
哉せうよト只曾先形を悔みほ  
あきふはりても一ひともふるつらの  
あくさくじうざんくも足な二とも終も和つひ  
からまきのじくからゆのへねく作のせきえ  
まほてゆせて下さるあらゆとがいすひ  
れどもまほも情へあるうの哉とよ

まほもテヌ

ああああよらんとままと揃あせう  
そこのがせ内のうちをちくに居う  
ううくまびくせ愁と情一途方  
そろそろがさらぐんを癡けうくやう  
マト縁の傷へ送りてみをとて捕  
あでねうアソクすくも面圓まほ  
とみさんを窮こも入くゆゆりへがま  
まゆへ住のめさんとまほ次ちよコリヤ

年 月

日	一	二	三	四	五	六	七

あと

まもと庄左衛門  
さまでと送さんふ  
身

東京在住

三種

どよあつても後あとをあくまで庄まちふまえ  
の門もんの庄まちすめのまくらごと透つさんふ  
ま開あらわさくともちやまめり

寶トウ之ノ卷ナハ後編ゴヒン三ミツ絃ゲン

東方子

